

場の理論ゼミ

Toshiya Tanaka

October 22, 2022

1 Introduction

- B4 の後期は [PS95] を研究室のゼミで読むことになったので、学びを記録したいと思います。
- 教科書中の式は PS (number) のように記します。

2 The Klien–Gordon Field

- p.14 で、 $E = \sqrt{p^2 + m^2}$ の方で計算した propagator

$$U(t) = \frac{1}{2\pi^2 |\vec{x} - \vec{x}_0|} \int_0^\infty dp \sin(p|\vec{x} - \vec{x}_0|) e^{-it\sqrt{p^2 + m^2}} \quad (2.1)$$

を直接評価する方法は、本でも引用されているように、[GR80, p.491]^{i.}を見れば良い。

$$\int_0^\infty x e^{-\beta\sqrt{\gamma^2 + x^2}} \sin \beta x \, dx = \frac{b\beta\gamma^2}{\beta^2 + b^2} K_2(\gamma\sqrt{\beta^2 + b^2}) \quad (2.2)$$

という式があり、この収束する積分の指数の肩を虚数倍ひねる、いわゆる解析接続をしていると解釈できる。元の積分は p が無限で発散し、虚数の指数関数は振動するので、被積分関数を見ると発散してしまうことがわかる。^{ii.}

- PS (2.31) で $\delta(0)$ の無限大をむしることについて、
 - GR を考えるときは無視できない。
 - SUSY を入れると出ない。
- PS (2.33) の計算は奇関数が対称区間の積分で消えることを考える。素直に代入して、

$$\vec{P} = - \int d^3x \, \pi(\vec{x}) \vec{\nabla} \phi(\vec{x}) \quad (2.3)$$

$$= - \int d^3x \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \int \frac{d^3p'}{(2\pi)^3} \left(\left(-i\sqrt{\frac{\omega_p}{2}} \right) (a_p - a_{-p}^\dagger) e^{i\vec{p}\cdot\vec{x}} (i\vec{p}') \frac{1}{\sqrt{2\omega_{p'}}} (a_{p'} + a_{-p'}^\dagger) e^{-i\vec{p}'\cdot\vec{x}} \right) \quad (2.4)$$

となり、

$$\int \frac{d^3x}{(2\pi)^3} e^{i(\vec{p} + \vec{p}')\cdot\vec{x}} = \delta^{(3)}(\vec{p} + \vec{p}') \quad (2.5)$$

を使うと、

$$\vec{P} = - \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} (-\vec{p}) \frac{1}{2} (a_p - a_{-p}^\dagger)(a_{-p} + a_p^\dagger) \quad (2.6)$$

となる。今、 $(a_p a_{-p} - a_{-p}^\dagger a_{-p} + a_p a_p^\dagger + a_{-p} a_p^\dagger)$ となるが³、 p と $-p$ が交互に入っているものは奇関数になり、消える。

$$\int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} (a_p a_{-p} + a_{-p}^\dagger a_p) = 0. \quad (2.7)$$

すると、添字の運動量は、符号が一致したものしか残らず、全空間の積分なので符号を変えて、全て $+p$ で計算する

^{i.} この本はネット上でも見れるが、1200 ページくらいあり、とても重いので注意。

^{ii.} この一連の議論は d 氏に教えていただいた。

テクニックが使える。これより、

$$\vec{P} = \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} \frac{1}{2} (a_p a_p^\dagger - a_{-p}^\dagger a_{-p}) \quad (2.8)$$

$$= \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} \left(a_p^\dagger a_p + \frac{1}{2} [a_p, a_p^\dagger] \right) \quad (2.9)$$

$$= \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} a_p^\dagger a_p \quad (2.10)$$

となる。最後の $[a_p, a_p^\dagger] = \delta(0)$ は偶関数と思うと消える。

- PS (2.40) は三次元空間の $d^3p/(2E_p)$ で measure を入れたものだがⁱ, $\mathbb{R}^{1,3}$ に埋め込むと $p^0 > 0$ の方の双曲超平面上の積分と思える。
- PS (2.41), PS (2.42) から, $\phi(x)|0\rangle_{\text{QFT}} \sim |\vec{x}\rangle_{\text{QM}}$, $\langle 0|\phi(x)|p\rangle_{\text{QFT}} \sim \langle x|p\rangle_{\text{QM}} = e^{ipx}$ と対応がⁱつく。
- section 2.4 では今まで、時間に依存しない Schödinger 描像でやっていたものを、Heisenberg 描像に移す。やりかたは、QM と同じように $\mathcal{O}_{\text{Heisenberg}} = e^{iHt} \mathcal{O}_{\text{Schrödinger}} e^{-iHt}$ とする。
- 生成消滅演算子の Heisenberg 描像は $e^{iHt} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{iHt}{n!}$ と $H^n a_p = a_p (H - E_p)$ などⁱⁱⁱ. を用いて, $a_p e^{-iE_p t}$ などになり、場の演算子も綺麗にまとまる。
- PS (2.51) の最後の評価は、鞍点ではないがⁱ, 振動の遅いところが積分に最も寄与すると思うと、 $E = m$ の値を採用すると考える。

References

- [GR80] I. S. Gradshteyn and I. M. Ryzhik, *Table of integrals, series, and products*, Academic Press, New York, 1980.
 [PS95] M. E. Peskin and D. V. Schroeder, *An Introduction to quantum field theory*, Addison-Wesley, Reading, USA, 1995.

ⁱⁱⁱ. 生成消滅のこのような関係式は、片方について調べると、もう片方はエルミート共役を取れば直ちに成り立つことを確認できる。